

濱口梧陵記念館(津波防災教育センター)ほか関連施設、遺構 調査結果

【要約】 訓練 × 先見性(問題意識・関心事) × 気持ちのゆとり(基軸・基盤があること) × 学び(継承) × 信頼関係

(目的)

濱口梧陵は、なぜ、稲むらに火をつけて津波から住民を逃がすことが出来たのか。

(調査方法)

現地現物現人の思想に基づき、和歌山県広川町の関連施設を訪問して情報収集した。

(結果)

- ・ 濱口梧陵は、12歳の時に本家の養子となり、銚子での家業であるヤマサ醤油の事業を引き継ぐ **(収益につながる基盤技術があった)**
20歳の頃、日本橋の本屋の渋田利右衛門より、「**自分のためにお金を使うよりも、世の中の役に立つ人に支援する方が生きたお金の使い方ができる**」ことを学び、勝海舟の支援を頼まれる。**勝海舟との交友では、先見性と人格に惹かれる。**
- ・ 三宅良斎(蘭医)と出会い、西洋事情を教えられ、国防問題に関心を抱く。そして、自ら、佐久間象山から兵学、砲術を学ぶ。
- ・ 1851年(嘉永4年) 広村に帰郷
- ・ **教育の必要性を痛感していた**濱口梧陵は、嘉永5年(1852)、濱口東江や岩崎明岳らとともに、村の納屋に剣術や槍術、国学や漢学を教える稽古場を開いた。(後に耐久社と命名)
- ・ 広村の村人は、50年から100年ごとに津波が襲来することを知っていた。
(15世紀初頭 波除石垣 を築く。1498年 明応地震 M8.2～M8.4、1605年 慶長地震 M7.9、1707年 宝永地震 M8.6)
- ・ 1853年(嘉永6年)、濱口梧陵は家督相続 **(これで、私財を投入することが可能となった)**
- ・ **調子での事業利益を広村の復興に転用することに理解を示す広村出身の経営層が支配的であり、広村への愛着に恵まれていた。**
- ・ **1854年(安政元年) 12月23日 午前10時頃、「安政東海地震」 M8.4 発生、住民を八幡神社に避難させた。(これが訓練となった。)**
- ・ **1854年(安政元年) 12月24日 午後16時頃、M8.4 「安政南海地震」 発生**、十数分後、津波が襲う。第二波が最も高く8mであった。

濱口梧陵も流されるが、八幡神社に辿り着く。

逃げ遅れて、海に漂流している者を案じて、安全な場所を知らせるために、道端の稲むらに火をつけた。

隣村から米を借用して炊き出しなどを支援 **(住民との信頼関係があった)**

- ・ 1855年(安政2年) 私財により、被災後、3ヵ月で、防波堤(広村堤防)の建設工事を開始 (年貢米の重い田地を防波堤の敷地にして減税、また、職を失った人の雇用となった) **ここで、調子の事業利益を、多くの経営層の出身地である広村の復興に利益転用する経営基盤に支えられる。**
- ・ 1944年(昭和19年) 12月7日 「東南海地震」 M7.9
- ・ 1946年(昭和21年) 12月21日 「南海地震」 M8.0 では、浸水程度に減災
- ・ 耐久社は、今も、耐久中学校の構内にあり、児童、生徒が、濱口梧陵のことをテーマに学習を行い、発表会を地域住民が広く聞くなど、文化が継承されていた。**(身分、地位などに関係なく、学ぶことの土壌が文化として継承されている)**
- ・ 教科書は、ラフカディオ・ハーンが脚色しているので、事実とは、少し違うことを考慮する必要がある。

(引用・出典)

<https://shippai.org/shippai/html/index.php?name=news1294>

<https://www.town.hirogawa.wakayama.jp/inamuranohi/>

稲むらの火の館、濱口梧陵記念館、津波防災教育センター

展示要覧

西太平洋地震・津波防災シンポジウム(事務局 気象庁)

濱口梧陵小傳

濱口梧陵傳

興味はあっても、なかなか実行に移せなかったが、下見と合わせて、二度、
この場所に来て、歴史と人々の心を感じて、体験することができました。
失敗学会では、現地、現物、現人 ということで、
その場所に行って、自分で見ることを大切にしています。

稲むらの火の館、耐久社、広村堤防など、濱口梧陵を学ぶ機会となりました。
江戸末期 1852年の頃です。西洋文明を学び危機感を抱いて防御を学んだ人
やっと、人のつながりの話に出会えました。
そこには、教育がありました。耐久社です。今も、耐久中学校に引き継がれています。

https://www.town.hirogawa.wakayama.jp/inamuranohi/siryo_goryo.html

<https://www.yamasa.com/enjoy/history/choshi/>

海が近く、
土堤 と 石堤
で防御

この堤防を築いた人々の心
は、つながっています。

海

石堤

土堤

松野撮影：
2025年1月24日(金)
5月24日(土)

梧陵は、教育面では、江戸時代末期に濱口東江、岩崎明岳とともに私塾を開設し、剣道や学業などの指導にあたり
ました。この私塾は後に「耐久社」と呼ばれ、変遷を経て現在の耐久中学校になっています。明治4年（1871年）に梧陵は大久保利通の命を受けて駅通頭に就任したのをはじめ、明治12年（1879年）には和歌山県議会初代議長に選任されました。議長辞任後は木国同友会を結成し、民主主義を広める活動を展開しました。明治18年（1885年）梧陵の長年の願いであった欧米への視察途中、ニューヨークにて永眠しました。

虚飾の文、華美な芸は省き
総じて実用に資する修行が肝要 ⇒ 村中の子弟は入学し・・・

松野撮影：
2025年1月24日(金)

耐久社

西暦1870年10月 設立趣旨が公開されています。

詳細は、(現代語訳): 濱口梧陵傳 平成28年3月31日 広川町教育委員会 を参照ください。

震災前後、
土木技術などを学んだ人材が居たこと、人と人の繋がりがあったことは、
偶然なのか、必然なのか?! 背後要因について、関心をもっています。



海

現地、現物、現人の機会を賜り、ありがとうございました。